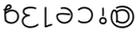


「明石が近侍だと落ち着く、というのが主の弁だが、自分よりはるかにやる気がない主を支え、ひいてはこの本丸を支えているのが明石だというのは周知の事実である。フードを食べ終えた猫明石は座り込んでいた明石に寄り、すり、と頬ずりをした。明石の手は自然と猫明石の頭に伸び、優しく撫でてやる。「あんたも難儀なところに来たなあ」

成り行きやけど自分が面倒見たるからな、と話しかけながら猫明石を撫でる明石を愛染と蛍丸は笑いをこらえながら見つめる。愛染も蛍丸も、自分たちの保護者のそういうお人好しなところが大好きだった。

〈了〉

二〇二二年四月十日 佐藤（こ）り発行



明石国行と猫明石国行

「もう、ほんまになんやねん……」

この本丸の近侍、明石国行は、ため息交じりに呟いた。目の前には自分そっくりの猫つぼい生き物がいて、今日の日課鍛刀で頭現されたその子の面倒を見るように、と主である審神者から仰せつかってしまったのだ。と

「にやん」

「なに？ お腹空いたん？」

「にやん！」

「明石の言葉がわかるのか、その猫は目を輝かせて嬉しそうに鳴いた。もともとと保護者氣質の刀である明石、弱

「猫……猫の頭を撫でてやりながら考えていた明石は、ふと閃いた。

「……虎も大きな猫やんな」

明石はそう口に出し、猫を抱き上げて粟田口派が使っている大部屋へと足を向けた。

「五虎退くん、おる？」

「は、はい、なんでしょう？」

訪ねた粟田口部屋では短刀たちがすごろくを楽しんでいた。声をかけられた五虎退が顔を上げ、部屋中の短刀たちの目が明石に集まる。そして、もちらんその腕の中

には明石そっくりの猫がいるのである。みんなすごろくをほったらかして明石のもとに集まってしまった。

「かわいいですね」

「明石さんそっくりじゃありませんか？」

「名前は何んて言うんですか？」

「名前がなんとなんとか答える。」「なんや主はんが竹札と間違うて猫札とかいうの使うて

「主さんが欲しがった猫じゃないの？」

「主さんに猫の面倒とか見れへんやろ」

「この猫、国行が面倒見たらろ？」

「どうやらそうみたいやなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「えー、国行よりかわいいよ」

「勝手なこと言わんと、ちよお手伝つて」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「えー、国行よりかわいいよ」

「勝手なこと言わんと、ちよお手伝つて」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「えー、国行よりかわいいよ」

「勝手なこと言わんと、ちよお手伝つて」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」

「あつたあつた、これやな」

「おー、ほんとに国行そっくりだなあ」